

長城を行く
第六回

得勝堡



万里の長城は明代になって、戦略的な防衛拠点から東に移る。元朝の残党や勃興する女真族の勢力が脅威になったからだ。いま、足を踏み入れた大同は張家口の宣府とともに、首都防衛の最前線だった。

万里の長城を行く旅は、すでに内陸

の山西省に達した。これからむかう得勝堡は張家口から鈍行列車で5時間の終着地、大同市の北郊50キロのところにある。国道208号線をそのまま進めば数キロさきはもう内蒙古自治区で、省境の町豊鎮は目と鼻のさきだ。

あたりには丘陵地が広がり、草原には羊が放牧され、開墾された農地に雑穀が実っている。遊牧と農耕が混在し、いま、まさに中国東北からユーラシア大陸を横断して西アフリカまでのびる農業遊牧境域線の真上にいるのだ、と

いう感慨がわいてくる。

得勝堡は一辺が100メートルほどの城壁集落を成し、長城を守る明代の軍隊が駐屯した。村は人の背丈の4〜5倍もありそうな黄土の城壁に囲まれている。内部は一本のメインストリートを背骨にして碁盤目状に整備され、土色の家々から明代の屯田兵がひよっこりとあらわれそうな気分になる。

ひと気のない城内に車で乗りつけたものだから、路地から一人またひとりと男や女、子供らがとび出してきた、なにしにきたのか、とか、どこか

らきた、南方人だろ、などと口々に質問される。人々の視線に敵意は感じられないので、カメラを2台もぶらさげた突然の闖入者に興味を持ったのだろう。堡内の生活などを聞いてみる。羊の毛や皮、肉の販売や農業でやりくりしているという。まっすぐ歩いていくと、じきに漆喰が剥げ落ちたレンガ積みみの建物に突き当たった。入り口には大事に杖を抱えた爺さまと素朴な顔をした二人の少女が静かに腰かけている。三角屋根にあしらった大きな星は、文革時代の名残りを残して懐かしい。こんな人里はなれた寒村にも政治の風は吹き荒れたのだ。小さな村はここで行き止まり、三角屋根の星のむこうには城壁がそびえる。

の間隔である。遼東鎮の北では女真族が広域に活動し、虎視眈々と長城越えを狙っていた。駐屯地や関所、見張り台などの数から、明朝は北方の韃靼や女真族を激しく恐怖していたことがわかる。

村の入り口をアーチ形にうがつた城門にのぼる。正面上辺にほどこされた精緻なレリーフのそばには2文字の門名があつたはずなのに、風化がすすんで識別できない。角度をかえてながめてみると、どうも「保障」と書かれていたようだ。長城を守つた軍隊の駐屯地にふさわしい命名だと思ふ。

得勝堡からの帰り道、数キロ西にある新栄長城に立ち寄る。なだらかな丘陵の北斜面には放牧地が展開し、南側には樹林と農地が広がる。その境を烽火台と土長城が平行してアップダウンしながら地平線までのびている。

西に傾いた太陽が草原に斜光を放ち、あちこちに点在する羊たちがながい影をつくつて移動していく。その影のむこうから、韃靼の騎馬戦士が長城めがけて疾走してきそうな風景である。

多かつたのは遼寧省を朝鮮国境まで貫いた長城線(遼東鎮)で、確認できるものだけでも87カ所、10キロに一カ所



右頁：得勝堡の城門。城内に長城を防衛する軍隊が駐屯していた。門名は風化してはっきり見えないが、かすかに「保障」という筆跡が残っている。

下：一辺が100メートルほどの城壁内には土色の建物が並ぶ。駐屯地の時代、このメインストリートに屯田兵が闊歩していたにちがいない。

左：三角屋根に配された大きな星のマークが懐かしい。爺さまは過去の苦難を嘔みしめ、二人の少女はバラ色の未来を夢見ている。



中村達雄(なかもら・たつお) ◆ラジオオベキ
ン、オリンピック、博覧会などに勤務し、中国に
16年間駐在する。現在、明治大学非常勤講師。